

「もとはこちら」のお話し

No.66 今月のテーマ 金環日食と、私達の人生



生死は 昼夜覚眠のごとく 一如なり

(平井謙次作 日めくり カレンダーより)

北原ゆり筆

さる五月二十一日、日本列島の広い範囲で金環日食が観られました。朝の七時二十分位からあたりが薄暗くなり始めると共に、少しずつ太陽が欠け始め、やがて空には美しいリング状の輝きがあらわれました。そして再び少しずつ明るさが戻ると共に、太陽は元の形にもどって行きました。

今回の日食は前回のそれとは違って、全国的に広い範囲で観られるとあって、日食が近づくにつれ、ニュースでも大きく採りあげられました。

観測する時には、目を傷めないための専用グラスを必ず用いるようにと、再々のアドバイスが流され、しかも安価なものの中には不完全なものが混じっている場合があるからと、それを見分ける方法までが知らされました。

また目を傷めないための注意にあわせ、観測に気を取られ、事故等に遭わないようにという忠告が繰り返され、本当に日本という国は懇切丁寧というか、誠に親切な国であると改めて感心したものです。

私が子供の頃にも日食を観測する機会があったのですが、その時は学校でロウソクを灯し、そのススをガラスにつけて、それを通して太陽を眺めましたが、やはりそういうやり方では目を傷めるという事がわかり、今ではロウソクグラスは禁止だそうです。

肉眼で太陽を直視すると、普通時の一万倍の光熱が集中されて目に入り、最悪の場合は失明する事さえあるという事です。

私は観測用のグラスを買い求めていなかったのですが、部屋に差し込む木の葉の影を観て、今回の金環日食を楽しむ事ができました。

木の葉の一つひとつの影が、太陽が欠けていく形のままに少しずつ欠け始め、やがてそれは丸いリング状の形となって現れました。

しかしそれはあっという間に終わり、普段通りの形に戻って行きました。時間にして十分位の事だったでしょうか。

この世はすべて、必然の連続の世界

ところでこの日食という現象は、全く当たり前の事ですが、太陽だけでも月だけでも、そしてまた地球だけでも起きる事はありません。日食が起きる為には、必ず太陽と月と地球の三つの存在が必要です。

そしてこれら太陽と月と地球の三つが重なり合っていていつ日食が起きるかという事については、夫々の軌道やその軌道を回る夫々の速度をみれば、専門家ならばすぐに計算できる事です。

何年何月何日に日食が起きるという事も、その日食の時間の長さも計算できますし、またそれがどの地域で見られるかという事も正確に知る事が出来ます。

なぜならば日食が起きるという事については、何一つの偶然性はなく、全てが必然の事であるからです。裏返して言えば日食は起こるべきして起きるのであり、必然であるからこそ、いつ起きるかという事や時間の長さ、そしてどこで観る事ができるかという事などが分かるのです。

くどいようですが、日食は予定通りの現象であり、起きるべきして起きて来た必然の結果であるということです。

さてこの日食ですが、太陽と地球の間に月が入って、完全に一直線上に重なった時に起きるのが金環日食ということで、その事については今更改めて説明するまでもありません。しかし昔の人は日食という現象がなぜ起きるのかが分からず、怖れの念を持って空を眺めたと聞きます。

天照大神が岩戸の陰に隠れてしまったというあの神話も、この金環日食が重なっているという説もあるようですが、太陽が隠れて急に暗くなり、いつもは丸い太陽が急にリング状になる現象だけを見れば、不吉な前兆として人々が怖れるのも無理からぬ事と思います。

一般的にいつて、訳のわからない現象というのは不気味であり、普通は怖いものです。

しかし科学が発達し、物事のメカニズムが解明され、日食の原因も分かっただけで、現代の人がそうである様に日食を怖れる人はなくなり、今ではめつたに観ることのできない珍しい天体ショーとして人々はこぞって観測し、その現象を楽しむ事さえ出来る様になるのです。

必然によって造られる、自分の人生

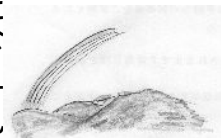
ところでこの日食に限らず、何らかの現象が起きる裏には、それを起こさせる為の原因というものが必ずある筈です。原因のない結果というものは決してないからです。

しかし今尚私達人間は、自分にとって一番身近な存在であるはずのその自分の人生が、なぜこいつという人生なのかという事については、殆ど無知の状態にあるといっても良いのではないのでしょうか。

例えば、自分がなぜ今の時代に生まれてきたのかという事や、自分の親がなぜこの人なのかという事、そしてなぜ自分は男として、或いは女として生まれてきたのかという事の原因が分かっている人は殆どいないと思います。

また、そういう宿命的な事まで持ち出さなくても、自分がなぜこの人と出会ったのか、そしてまた、なぜ自分が、例えば宇宙なら宇宙という世界に興味を持ち、そういう事に大きな関心を向ける人生を送る事になったのか等という事が分かっている人は殆どいないと思います。そして良いにつけ悪いにつけ、人生というのは偶然の連続であり、矛盾に満ち、また理不尽なものだと感じている人も多いのではないのでしょうか。

しかし実は私達一人ひとりの人生も、原理としては先の日食が起きるのと全く同じメカニズムによって成り立っているという事です。自分が数ある条件の中で、こういう条件の所を選んで生まれてくる事も、そしてある事が原因となって死んで行くという事も、そしてその人生の中身のあれこれの全てが、それはあの日食が必然によっ



て二千十二年五月二十一日の朝起きて、しばらく後にまた消えていくのが当然であつたのと同様、全ての人にとつてのその人生は、当然の事ばかりであるという事です。

誰にとつての人生も、そこには偶然という事は一切なく、全てが必然の連続によつて成り立っているという事です。

生き続けている、生命の世界

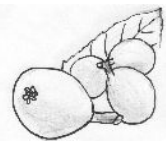
どういう事かといいますと、私達が日々体験し続けているあらゆる事は、全て、何らかの結果であるという事です。目に見える現象世界というのは、結果の世界です。そして結果を作り出すものを原因というわけですが、原因はすべて当事者の中にあります。

日食の場合で言えば、当事者とは太陽であり月であり、そして地球です。幾つもの原因が、そして幾つもの過去が重なり合つて、そこにはじめて一つの結果という現象が現れて来るわけですから、原因と結果は必ず一致するという事です。

私達の人生も同様です。例えていえば、人生とは日食現象の様なものです。一人の人が生まれてきて、そして何年か経つた後、またその人は死んで行くわけですが、あの日食が起きていない時も、太陽や月、そして地球が常に存在している様に、その人の肉体は滅び、死んでも命そのものは死なずに、今も生きています。

そして太陽と月と地球の三つが重なつた時にだけ日食が起きるように、お父さんとお母さんが重なつて一つになつた時、そしてそこに私の人生が起きる為のあらゆる条件が重なつた時に、この世における私の人生という現象がまた始まるのです。

しかし、丁度あの日食がほんの十分ほど消えていった様に、私が私としてこの現象の世界に身を現わしているのは、ほんの短い時間にはすぎません。少しすれば必ずまた消えて行きます。しかし日食という現象が消えた後も、地球も月も太陽も存在し続けているように、私という存在そのものが無になつたり、消えてなくなつてしま



つたりするという事はないのです。生命あるものは、目に見えない状態となつても生き続けているのです。

自分の中にある、もうひとりの自分

ところで日食の時、太陽に影を落とす、日食を作り出しているのは一般的には月だといわれています。しかし太陽に影を落とすしているのは、実は月であると同時に、地球でもあるのです。ですから私達が眺めている日食は、太陽であり月であり地球でもあるわけです。地球は私達の星であつて、私達自身でもあります。いわば私達は、日食の太陽の中に、自分自身を眺めているわけです。

自分で自分の影を、遠くから観ているという事です。

さて日食の時、私達が太陽の影の中にある自分自身の影を見ているように、いつも私達は、自分の中にいる「もうひとりの自分」を観ながら生きているという事が出来ます。

それは自分の中に内在しているもう一人の自分です。この、もう一人の自分を自分の内に観れば、それはいわゆる内在智となり、外に観れば、外なる神仏となります。

いずれにしても絶対的な存在です。最高の理想の極地とか憧れの最高峰であり、心の中に誰もが持つている完全無欠なものです。

それは人間である私達の肉体を持つては決して到達できない存在ですが、その存在によつて私達全ての人は生かされております。

それを例えて言えば、全ての人が太陽のエネルギーによつて生かされておられるが、この肉体をもつては誰一人として太陽に近づくことができないのと同じようなものです。近づくどころか、肉眼でもつて直視すらできない太陽と同様、その完全無欠な存在は、決して私達は肉眼で見たり、触つたりする事はできません。しかしその存在なしでは、私達は一瞬たりとも生きていけないという事です。

目には見えなくても、また心にも感じられなくても、私達は無意識のうちに「内なる完全無欠な、もうひとりの自分」を見つめ、感じ

ながら生かされているのです。

それを小さく言えば良心といい、大きく言えば唯一無二の絶対者であり、神仏という事が出来ます。

今日の過ごし方で、明日の運命が決まる

ところで、日食が起こる事が必然であるように、私達のこの人生も、全ての事が必然によって成り立っているのです。

そして天体で繰り返し、繰り返し日食という現象が起きてくるように、繰り返し、繰り返し、私達の人生という現象も起きています。

この肉体によるこの人生は閉じてても、いつかまた必ず新しい人生が始まります。その人生も、今生と全く同じように、全ての事が必然の連続によって起こってくる当たり前の人生です。



次の人生をどの様なものにするかは、今の生き方次第です。

なぜこんな人生を自分は送らなければならないのかと嘆くような人生を送るのも、生き生きとした楽しい人生を送るのも、今の、この一瞬一瞬の生き方にかかっています。

今日の過ごし方が明日のあり方に大きく影響する様に、今この瞬間の生き方が、そのまま次の人生の原因となるのです。そしてその原因にふさわしい結果の人生を、私達は生きる事になるのです。

次の人生というのは、明日の事が、あさつての事が、それとも今の人生を終わっての次の人生の事なのか、それは分かりません。しかし自然の摂理通りの人生が必ず開けてくる事は、間違いありません。

あの白隠禅師の言われる「因果一如の門開く」ということで、今の生き様に一番ふさわしい人生が開けてくるのです。自分の人生を作り出しているのは自分自身であり、それを経験するのをもまた自分自

身です

心の中に思い描く完全無欠な像に限りなく近づくまで、私達は人間として、人間としての軌道を生きる事になります。

何を想い、何を話し、何をしたかのその一つひとつの全てが、宇宙のレコーダー、即ち自分自身の中に記録され、何回も何回も私達は肉体を持って生まれてきて、自分という現象を表わしながら生かされていくのです。今も私達全ての人がその道中の旅人です。

ところで前回の金環日食は二十三年前の九月二十三日で、沖縄で観測する事が出来ました。次回は十八年先の二千三十年の六月一日で、北海道で見られるという事です。

一八年先といえば、私達はどという状態で生きているでしょうか。中にはすでに肉体衣を脱いで、次なる新しい人生の準備に入っている人がいるかもしれません。

いずれにしても私達のいのちは生き続け、生かされ続けているのです。それを往生といいます。行ったり来たりで、その事を平井先生は、次のように表現されました。

「死んでも生きてても、生き様ちよつと変わるだけ。
あつちに行ったり、こつちに来たり」

今は「こつち側」にいる私達です。

〔ご案内〕

次回七月は、七月十四日(土)を予定しています
勉強会及び月報についてのお問い合わせは、左記まで。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com

073・461・6300